

令和 3 年 6 月 24 日現在

機関番号：23901

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2020

課題番号：18K12401

研究課題名（和文）文献とフィールドワークによる方言史の再構築

研究課題名（英文）Reconstruction of dialect history by literature and fieldwork

研究代表者

久保 愛 (Kubozono, Ai)

愛知県立大学・日本文化学部・准教授

研究者番号：80706771

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は方言を反映する文献と、フィールドワークによって、方言の歴史を再構築することを目的とする。特に鹿児島方言を中心に、ゴンザのロシア資料や近現代の方言談話、現代の方言話者への調査を行ない、テンス・アスペクト・ムード（意志や推量）や主語や目的語の格標示、準体助詞（現代共通語の「食べるのが遅い」の「の」にあたるもの）について調査・分析し、それぞれのカテゴリの歴史について論じた。また九州方言の特徴的な機能についての記述も行った。形容詞の重複形や形容詞語幹+サニという形式について、その形態的特徴や意味的特徴について報告した。さらにロシア資料の受容や、ロシア資料に関する著作についての論評も行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本語の歴史という場合、中央語（京阪語・江戸語）が扱われることが多い。それは中央語を反映した文献が比較的豊富に残っていることが要因である。他方、方言の歴史は、それを反映する文献の僅少さから、中央語に比してあまり明らかになっていない。現代において多様な方言が見られることから、それぞれの方言で異なる歴史の変遷があったことが予想される。そうした多様な歴史を一つ一つ明らかにすることで、日本語史を複線的・重層的に捕らえることができる。本研究は日本語史の多様性を明らかにするための一つの試みである。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to reconstruct the history of dialects through literature reflecting dialects and fieldwork. Especially, regarding Kagoshima dialect, this study investigates Russian materials of Gonza, discourses which reflect modern and postmodern dialects, and modern dialects speakers, and investigates. Then this study analyzes tense aspect mood, case indication of subject and object, and nominalization particles (which correspond to "no" of taberu-no=ga oso-i "slow eating" of modern common language), and discusses the history of each category. And, this paper clarifies the reduplication form of adjectives in Kyushu dialect and the function of the form of adjective stem-sani, and also reports the case marking of adjectives. In addition, the following were also carried out: The acceptance of the dialect manuscripts, and the review on the literary work on the Russian manuscripts.

研究分野：日本語学

キーワード：鹿児島方言史 ロシア資料 フィールドワーク 談話 格 テンスアスペクトムード 準体助詞 形容詞

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

日本語史研究は、伝統的な国語学において相当の厚みをもった記述の蓄積がある。しかし、その対象となる「日本語」は残された文献の質・量的な問題から、中央語(京阪語・江戸語)が中心にならざるを得ないことが多い。方言は文献に記されることが少ないために文献上の制限があるわけである。他方で、現代に多様な地理的バリエーションが見受けられることから、それぞれに異なった歴史が存在することが予測される。

そこで、本研究は、近世中期に偶然編まれた方言文献を起点として、中央語史に比してあまり明らかになっていない方言の歴史の一端を明らかにすることで日本語史研究に第三、第四の視点を提示し、地理的バリエーションも含めた「日本語史」という重層的な把握を目指したものであった。

2. 研究の目的

上記の背景に基づき、本研究ではゴンザのロシア資料や近現代の談話(3.研究の方法参照)とともに、現代方言のフィールドワークによって、いくつかのカテゴリの歴史的な変化・発達の記述を通して、鹿児島方言がどのような歴史を辿ってきたのか、そしてその歴史は中央語(京阪語・江戸語)の歴史に対してどのように位置付けられるのかを明らかにすることを目的とした。報告者の研究は、最終的には文法体系全体について史の変遷の記述を目指すものであるが、それは長期的に亘るものであるため、本研究課題では特にテンスアスペクトムード、準体助詞、形容詞に絞った。目的を達成する過程で、問いが派生し格標示や方言文献の受容についても記述することになった。

3. 研究の方法

言語史、特に文法形式について研究を進めることから、まず方言を反映した文献を扱い、当該資料の中での言語現象の実態を調査する。その結果と、近現代の方言談話や歴史的変化の結果としての現代方言の様相とをつきあわせることで、史の変遷を記述する。その際、文献を単に年代順に並べるだけでなく、文献ごとの性質に留意して考察を行なった。対象資料等は以下の通りである。

・ゴンザのロシア資料：1729年にロシアに漂着した鹿児島の少年ゴンザが関わって作成された辞書・文法書・テキストなど6点。ロシア語を鹿児島方言に翻訳した対訳資料である。鹿児島方言訳部分もキリル文字で表記される外国資料であり、当時の方言を反映する。方言資料が僅少な時期であり、鹿児島方言史を記述する上で起点となる資料である。

・岩山トク氏の談話：西郷隆盛の義妹・岩山トク氏(安政3年生まれ)が、郷土史研究家の勝目清氏を聞き手に西郷について鹿児島方言で語る談話。紙テープに録音された約35分の音声は鹿児島市維新ふるさと館に所蔵され、現在はデジタル化の上、一部が公開されている。岩山氏は幕末から明治初期を言語形成期とする話者であり、ゴンザのロシア資料に続く方言資料として有用である。

・方言ライブラリ：鹿児島県内各旧市町村のうち88市町村で収録された明治～大正・昭和初期生まれの話者による方言談話集である。伝統方言の記録を目的としたもので、各地の音声データとともに漢字仮名交じりの文字化・対訳本が鹿児島県立図書館にて所蔵・公開されている。

・『全国方言資料』(日本放送協会編)：伝統方言の記録収集を目的として作成されたもので、全国84地点の自由会話と各地点共通の場面設定のある会話の2種の談話が収録される。『九州編』所収の鹿児島方言談話を使用。

・方言調査：70-90歳の方言話者に対面調査および2020年はアンケート・電話にて調査。地点は鹿児島県薩摩川内市、鹿児島県南さつま市、鹿児島県薩摩川内市里町、宮崎県東臼杵郡椎葉村。

4. 研究成果

以下、カテゴリごとに成果を報告する。

(1)テンスアスペクトムード

現代共通語では、意志をウや動詞言い切り形、推量をダロウが担い、両者を分けて表現する。しかしかつては意志と推量とが別形式ではなかったことが知られている。

現代鹿児島方言ではド(<ロ<ラウ)が推量を担い、意志は動詞言い切り形あるいはウが担うというように、共通語と同じ区別がある。他方でロシア資料ではウが意志も推量も表すことができたということが指摘されている(彦坂2013)。そこで、ロシア資料から現代に至るまでに意志と推量がどのように分化したのかを詳細に検討した。

ロシア資料では彦坂(2013)の指摘通り、ウが意志も推量も表すことが追認でき、意志動詞にも無意志動詞にも接続して推量を表すことがわかった。また推量専用形式と思しい口1例も見つかった。次に、近現代の談話を調査すると、ウで推量を表す例はあるものの、無意志動詞や形容詞ばかりで、意志動詞+ウの例は見られなくなっていた。ここから、近世中期にはウが意志動詞

にも無意志動詞にも接続して推量を表せていたのが、近現代に入ると、ウが接続しても推量と容易に解釈できる無意志動詞や形容詞のみに偏り、近世後期以降に意志と推量を分化させる方向へと変化したことがわかった。この変化の方向性は、江戸語や京阪語（佐伯 1993、鶴橋 2013、金澤 1998）や、鶴岡方言（船木 2000）で指摘される方向と同じであることを示し、「分析的傾向」（田中 1965）が中央のみで起こるわけではないこと（船木 2000）を裏付ける結果になった。

また、上記の意志・推量に与るウや口(ド)と関わりの深いテンスアスペクト形式との関係を、動詞終止形の機能とともに考察した。（論文）

(2)準体助詞

準体助詞とは名詞のような振る舞いをする助詞のことで、共通語ではノがこれにあたる（モノ準体：書いたノ（＝モノを指す）を渡した/ コト準体：書いたノ（＝事柄を指す）を知らなかった）。本研究では特に用言を上接するものを対象とした。

中央語史において古典語では連体形の形で名詞句を形成していたが、中世末期頃に準体助詞ノが現れ明治期にかけて定着したこと、コト準体が相対的に遅くまで準体助詞なしでも許容されていたことが知られる（青木 2016、坂井 2019 等）。他方で日本語諸方言の準体助詞は、形態的特徴はもとより未だ助詞なしでもよい地域や準体助詞がほぼ必須の地域等さまざまな状況にある。

現代鹿児島方言の準体助詞はトという音形をとり、かなり義務的に現れる。九州方言は近世中期の段階で「十分な準体助詞化があった」とされ（彦坂 2006）、確かに準体助詞は多数存在するものの、ロシア資料には準体助詞なしの例が若干見受けられ、現代方言と全く同一であったわけではないことがわかった。ロシア資料で準体助詞なしが許容されるのは、事柄を表すコト準体で、助詞ニが後続する傾向にある。

近現代の談話では準体助詞なしの例はほぼ見られず、トイウを含む環境（たとえば「アワフンツ オ シテ（＝粟踏みという を して）」のような文）においてのみ準体助詞なしがまとめて観察されることがわかった。さらに、現代方言の話者に調査を行なったところ、通常的环境では準体助詞が必須であり、トイウを含む環境においては、個人差があるものの、徐々に準体助詞が必要になりつつあることがわかった。

コト準体に準体助詞なしが見られることは京阪語や江戸語と同じであり、中央語とさほど変わらない時期に同じ方向への変化が生じたことが見て取れる。また、トイウを含む環境において準体助詞なしが許容されるのは江戸語（坂井 2019）と同じ傾向であることがわかった。（口頭発表の一部。図書）

(3)形容詞

(3)-1 形容詞の重複

鹿児島県薩摩川内市甕島里方言では、動詞言い切り形の重複によって後件時の付帯状況を表す（森他編 2013）。さらに、本方言では形容詞の言い切り形でも形容詞の重複を作ることができ、後件の動作を行なうときの主体の感情感覚を表す。多くは感情感覚形容詞から形成されるが、こうした特徴は現時点で管見の限り他方言での報告は見られない。

なぜこのような形式が発達したのか、その理由は以下のように考えられる。中央語において、動詞の言い切り形の重複は、副詞化し生産性を失ったとされるが、西日本方言では動詞の言い切り形の重複がまとめて見られる（国立国語研究所編 1989）。この形を用いる中国地方や他の九州方言では動詞の言い切り形の重複が幼児語とされるが、本方言ではそうした位相的な制限がなく、動詞言い切り形の重複の生産性が元々高かったことがわかる。こうした生産性の高さという個別の事情から、本方言では独自に形容詞重複を生み出したと考えられる。（学会発表の一部。追加調査と修正の上、論文化の準備中である）

(3)-2 形容詞語幹 + サニ

九州方言、特に九州西部の複数地点では形容詞語幹 + シャシトルの形で他者の感情感覚・評価を表すことができると言われる（工藤編 2001、村上 2004 等）。宮崎県椎葉村でもこの形は用いられ、共時的な形態音韻規則の観点からは形容詞語幹 + サ + ニ + シトルの形に由来すると考えられる（以下サニシトル）。この形式は村上(2004)が指摘するように他者の感情感覚や評価を表し、1人称文には基本的に使用できない。また、多くの方言ではサニシトルの述語の形での報告が多いが、本方言では形容詞語幹 + サニの形で従属節に生起でき、原因理由を表す。

中央語や共通語の形容詞語幹 + サニ、あるいは他者の感情感覚を表す形式（形容詞語幹 + ガツテイル/ソウニ）などと対照すると、機能的な重なりは見受けられるものの、中央語や共通語の形式とはかなり異なった特徴を示すことから、中央語と同じ素材から作られた形式ではあるが異なる方向への発達を遂げたことが伺える。（学会発表の一部。追加調査と修正の上、論文化の準備中である）

(4)主格・属格の助詞ガ・ノ

九州方言では、主格助詞にガとノの2つがあること、それらが尊卑に基づくことはよく知られている(ガ=卑, ノ=尊)。他方で近年ガ・ノの対立を尊卑説も含めて動作主性として捉えなおす試みが行なわれている(坂井 2013, 同 2018 等)。また、九州方言では属格としても格助詞ガとノが用いられることから、両者を併せて、方言ライブラリの薩摩半島北部の談話を調査した。

その結果、主格ノは尊敬表現と共に起る例とともに、有生性階層の低い位置にある名詞句が主語の文・無意志動詞や形容詞などの他動性の低い述語をとる文に現れること、主格ガにはそうした制限がないことがわかった。したがって、動作主性が低い尊敬表現の文とともに、主格ノは動作主性が低いことを表す助詞であると考えられる。他方、属格ガは名詞句階層の上位に現れ、属格ノは名詞句階層のうち3人称以下に現れることもわかった。

この結果を踏まえたロシア資料の主格・属格ガ・ノの調査から、主格ノは尊敬表現との共起と動作主性の低い文に現れること、主格ガはそうした制限はないことを指摘した。また属格ガは分布が1人称代名詞にほぼ限られることが指摘されているが(江口 1990)、その限定的な現れは資料性の問題が関与している可能性がありうることを提案した。(学会発表の一部。論文)

(5)対格の助詞ヲ(オ)

現代鹿児島方言では基本的に標示が義務的であることが指摘されているが(木部 2019)、ロシア資料では標示がまちまちであることから、ロシア資料の対格標示の条件、ひいてはそこに反映される当時の鹿児島方言の対格標示の条件を探った。

ロシア資料では他動詞目的語になる名詞句が有生物である場合と、ロシア語動詞一単語を他動詞目的語+動詞の形で訳出する場合(この場合必ず動詞の直前に目的語名詞句が現れる)である。ロシア語において有生物が他動詞目的語になる場合、生格(属格)の形を取るという特殊な振る舞いをする(活動体生格)。対応するロシア語名詞句が有標の形をとる場合に対格標示がなされるため、ロシア語側の影響が考えられる。

他方、ロシア資料と地理的に連続する薩摩半島北部の近現代の談話では基本的にオの標示がなされるが、いくらか無助詞と思われるところがあり、それは他動詞目的語になる名詞句が無生物である場合と、述語の直前に目的語名詞句が置かれる場合で、有生性と隣接性が関与している可能性がありうる。

ロシア資料の対格標示はロシア語の影響を多分に受けており、文献の様相をそのまま当時の鹿児島方言の反映とは見なすことはできないが、近現代とロシア資料とで似た傾向が見いだせること、有生性と隣接性と格標示の関連は諸方言・諸言語でも見られることなどから、ロシア資料の対格標示の分布は当時の鹿児島方言の様相を部分的に反映するかもしれないという見通しを示した。(学会発表の一部、学会発表の一部。それらを発展させた図書)

(6)ロシア資料の受容と利用・ロシアにおけるキリシタン資料

ロシア資料内部の言語的特徴のみならず、資料が後の時代のロシアにおいてどのように受容・利用されたのかについても研究を行なった。エカチェリーナ二世の時代にサンクトペテルブルクで作成された、ロシア語見出しに対して約 200 の言語・方言を挙げた対訳辞書が 2 種存在する。一つはパラス編『欽定全世界言語比較辞典』(以下パラス編)で、日本語の項目には鹿児島からの漂流民ゴンザのことばや東北方言、キリシタン資料の語彙が含まれるとされる。もう一つはヤンコーヴィチ編『アルファベット順全言語および方言比較辞典』(以下ヤンコーヴィチ編)で、パラス編で挙げられた日本語に加えて大黒屋光太夫のことが含まれたものである(辞書の名称は村山 1965 に従う)。それぞれの語彙の典拠を明らかにするとともに、光太夫の言語的特徴についても補足的に報告した。

村山(1963)、同(1965)ではゴンザのロシア資料のいくつかとパラス編との比較がなされており、明示的ではないものの、ゴンザのロシア資料の一つ『新スラヴ日本語辞典』が原拠であると結論づけたものと思われる。そこで、改めて調査してみたところ、やはり他のゴンザのロシア資料と比較して『新スラヴ』の方が一致する語が多く、何よりもパラス編の誤写・誤植に『新スラヴ』を見たことによってしか起こりえないものが散見されることから、パラス編の編者(あるいはパラス編の日本語の項目担当者)は明らかに『新スラヴ』を参照してこの辞書を作成したことがわかった。

他方、キリシタン資料との比較では、キリシタン資料のうち『日葡辞書』あるいは『日西辞典』から日本語を採録したとされるが(村山 1965)、ヨーロッパで流布していたのはコリヤードの日本語学習書であること、また資料内部のアクセント記号や動詞の挙例のあり方から、コリヤードの『羅西日辞書』を典拠としていることがわかった。『新スラヴ』にしても『羅西日辞書』にしても、これらが日本語引きではなくロシア語あるいはラテン語引きの辞書であることから後代の資料編纂に用いられたと思われる。

またヤンコーヴィチ編に見られる大黒屋光太夫の語彙は、ロシア人(あるいはドイツ系)の編集者が表記した可能性がある箇所と、光太夫が表記した可能性がある箇所とが混在している可能性があること、現代方言と異なる音声的特徴がある可能性などを報告した。(学会発表。内容を修正した上での論文化を準備中である)

(1)-(6)を概観して、中央語史と直接の接触がなくとも同じ方向へ変化する現象と、異なる方向への変化が見られる現象とがあった。中央語も含めて個々の方言は日本語のバリエーションである一方、それぞれに個別の事情があることから別の発達を見せるものと思われる。

その他、ロシア資料に関する著作に対して、文法・音韻の観点から論評を行なった。(論文)また、甕島里方言の形容詞のとりうる格についても報告を行なった。(学会発表)

参考文献

- 青木博史 (2016) 『日本語歴史統語論序説』ひつじ書房
江口泰生 (1990) 「一八世紀初頭の薩隅方言における「ノ」と「ガ」の用法」『語文研究』69
金澤裕之 (1998) 『近代大阪語の変遷』和泉書院
木部暢子 (2019) 「対格標示形式の地域差 無助詞形をめぐる」『東京外国語大学国際日本学研究報告』5
工藤真由美編 (2002) 『方言における動詞の文法的カテゴリーの類型論的研究』平成13年度科研成果報告書 No.1
窪園晴夫監修, 森勇太・平塚雄亮・黒木邦彦編 『甕島里方言記述文法書』国立国語研究所
国立国語研究所編 (1989) 『方言文法全国地図』大蔵省印刷局
佐伯哲夫 (1993) 「ウとダロウの職能分化史」『国語学』174
坂井美日 (2019) 「上方語と江戸語の準体の変化」矢島正浩・金澤裕之編 『SP 盤落語レコードがひらく近代日本語研究』笠間書院
田中章夫 (1965) 「近代語成立過程にみられるいわゆる分析的傾向について」『近代語研究』1
鶴橋俊宏 (2013) 『近世語推量表現の研究』清文堂出版
原口裕 (1978) 「連体形準体法の実態 近世後期資料の場合」『春日和男教授退官記念語文論叢』桜楓社
彦坂佳宣 (2006) 「準体助詞の全国分布とその成立経緯」『日本語の研究』2-4
船木礼子 (2000) 「江戸期鶴岡方言における意志・推量表現形式の変化」『現代日本語研究』7
村上智美 (2004) 「熊本方言における「寂ッシャシトル, 高ッシャシトル」という形式について」
工藤真由美編 (2004) 『日本語のアスペクト・テンス・ムード体系 標準語研究を超えて』ひつじ書房
村山七郎 (1963) 「パラス(P.S.Pallas)編「欽定全世界言語比較辞典」の日本語について」『国語国文』32 - 11 (村山(1965)に所収)
村山七郎 (1965) 『漂流民の言語』吉川弘文館

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 久保園愛	4. 巻 4
2. 論文標題 鹿児島方言におけるテンス・アスペクト・ムードの歴史	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 青木博史・小柳智一・吉田永弘編『日本語文法史研究』	6. 最初と最後の頁 199 - 221
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 久保園愛	4. 巻 130
2. 論文標題 鹿児島方言における格助詞ガ・ノの分布 近現代の談話とロシア資料を対象に	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 語文研究	6. 最初と最後の頁 1-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 久保園愛	4. 巻 16-1
2. 論文標題 書評 駒走昭二著『ゴンザ資料の日本語学的研究』	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本語の研究	6. 最初と最後の頁 85-92
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20666/nihongonokenkyu.16.1_85	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 1件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 久保園愛
2. 発表標題 18世紀初頭の鹿児島方言における対格表示について
3. 学会等名 第12回ブラジル日本研究1 国際学会（CIEJB）・第25回全伯日本語日本文学日本文化大学教員学会（ENPULLCJ）（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 久保園愛
2. 発表標題 ロシア資料における格助詞 の機能
3. 学会等名 九州大学国語国文学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 久保園愛
2. 発表標題 ロシア漂流民達の日本語を反映する『欽定全世界言語比較辞典』とその改訂版『アルファベット順全言語および方言比較辞典』の資料性の検討
3. 学会等名 第122回国語語彙史研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 久保園愛
2. 発表標題 甌島方言の二格・バ格標示の形容詞
3. 学会等名 日本言語学会第159回大会ワークショップ(企画代表:窪園晴夫)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 久保園愛
2. 発表標題 鹿児島方言における主格・属格標示とその地域差
3. 学会等名 国立国語研究所シンポジウム「日本語文法研究のフロンティア 日本の言語・方言の対照研究を中心に」
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 久保園愛
2. 発表標題 方言と中央語の対照 共通点と相違点
3. 学会等名 日本語学会2021年度春季大会シンポジウム「フィールドに入る, フィールドを広げる」(招待講演)
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 筑紫日本語研究会編	4. 発行年 2021年
2. 出版社 風間書房	5. 総ページ数 513
3. 書名 筑紫語学論叢 日本語の構造と変化	

1. 著者名 矢島正浩編	4. 発行年 2022年
2. 出版社 和泉書院	5. 総ページ数 -
3. 書名 中部日本・日本語学研究論集	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------